

『聖なる樹々』補遺

「十六桜」と正岡子規の句

牧 野 陽 子

ラフカディオ・ハーンの『怪談』（1904年）におさめられた短編、「十六桜」は、枯れかかった桜の樹を自分の命とひきかえに助ける侍の話である。

「伊予の国の和気郡に、十六桜と呼ばれる有名な桜の老樹がある。そう呼ばれるのは、陰暦の正月十六日になると花が咲くからで、しかもその日にしか咲かないからである。」と始まり、「桜が咲くのは普通、春になってからだ、この樹は大寒の最中に花が咲く。しかし十六桜は自分の命の力で咲くのではない。自分のものではない、別の命の力で花が咲く。この樹にはある人の霊が宿っているのである」とつづく。簡潔な表現で、冬のさなかに花を咲かせる寒桜の謎めいたイメージを示した後に、言い伝えが語られて、この樹の中の靈魂とは、慈しんできた桜の樹のもとの切腹をし、樹の身代わりとなって命を絶った年老いた侍の魂だとわかる。わずかなページの数ながら、強い印象が残る作品である。

十六桜は、伊予の国つまり松山に実際にあった桜の木であり、ハーンは『文藝倶楽部』という雑誌に明治三十四年に「諸国奇談」の一つとして載った「十六日櫻」なる短文を素材にこの作品を書いた。その原話も、「伊予国温泉郡山越村竜穩寺の境内に十六日桜と言う一つの桜樹あり」と同じように始まるが、続いて昔から文人墨客、天皇までがこの花を訪ねて愛でてきたことが述べられ、最後に「諸君も道後温泉に入浴の際には一度杖を曳き賜え何でも道後よりは二十町に不足そうな」と終わる、いわば地元の名所旧跡の縁起を記した文である。その中で、桜の早咲きの由来については、こう記されている。昔、「花を愛する翁」がいて、ある年の正月十六

日、この樹下にたたずみ、自分もそう長くはない、再び花をみることができるだろうか、と独り言したところ、不思議にも桜樹が忽ち花を咲かせた。翁はとても喜び、人も皆涙を催し、「実に草木さへも心ありて其情に感ぜしならん、夫より今に至る迄日を違えず蕾を結び花咲く」と。

ハーンの世界「十六桜」を原話と比べると、元の言い伝えにはない要素が加わっていることが指摘できる。第一に、侍が桜の樹の下で切腹をすること。第二に、侍が桜をいとおしく思い、そのために死のうと思うのは、桜が年月をへた古木だからだ、ということである。このことが物語のなかで、どのような意味をもつのか、そしてハーンがいかにして素朴な日本の桜の伝承を、世紀末の雰囲気漂う樹木への転生への物語として語りなおしたかについては、すでに論じた¹⁾ので、繰り返さない。

本稿では、「十六桜」の解釈に新たに関わることを二つ補足しておきたい。まず切腹という点について少し説明を付け加える。ハーンの世界の文章のなかでは、“さむらい”“はらきり”という日本語がそのまま使われている。日本の侍による“はらきり”という行為が、西洋人読者に対して強いインパクトをもっていたことがわかっていたのだろう。当時、すでに、日本の切腹という自殺の儀式は、世界に知られていた。そのきっかけになったのは、1868年に兵庫で起きた滝善三郎という人の外国人襲撃事件であり、この時、何人かの侍が切腹という形で処刑された。しかも、その切腹が外国側の代表団の目で行われたために、侍が静かに次々と腹を切っていく様子が、驚きをもって、センセーショナルに諸外国に報道され、“はらきり”という言葉が広く知られるようになる。そして、ちょうどハーンがこの「十六桜」を書く四年前の1900年には、新渡部稲三の英語の本、『武士道』がアメリカで出版されて、欧米で評判になった。この本のなかにはハーンの名前もでてくるのだが、新渡部は、『武士道』の中で腹切りについて、丸々一章を設けて説明をして、切腹が日本の武士の高潔な精神、忠節、勇気、正義感といった侍の倫理を象徴する儀礼的な

行為であるというイメージを世界に定着させた。

もっとも、ハーンの「十六桜」の侍もそのような武士道の倫理の表明として腹を切ったのかというと、そうではない。枯れる寸前の桜の樹を助けた侍の行為には気高さも感じられるが、それは忠義・礼節・名誉などとは関係なく、自己犠牲の精神がそこで強調されているわけでもない。すでに論じたことだが、ハーンの作品においては、切腹は樹木への意志的な転生の儀式として行われる。本人が意図して自ら死に、霊が桜の樹に乗り移るのであり、その意図の大胆さと強さが、物語の表面的な静けさに烈しさをにじませている。ハーンが「十六桜」の侍に切腹をさせた背景には、新渡戸などによって西洋に広められた武士的行動としての切腹のイメージがあったということ、だがハーンはそこに全く別の意味をこめて、侍の死の意味を鮮やかに照らし出したのだということをここで確認しておくのは無駄ではないだろう。

今ひとつ、ハーンの作品「十六桜」について補足すべきことがある。作品冒頭にかかげられた俳句に関してである。題名の下に、「Uso no yona / Jiu-roku-zakura / Saki ni kerī!」という一句が日本語のままエピグラフとして置かれているのだが、作者名が記されていないため、これまでの研究では、誰の句かわからないとされ、この句が作品冒頭に置かれている意味についても言及されることがなかった。

しかし、実はこれは松山の龍穩寺の桜を詠んだ正岡子規の「うそのやうな十六日桜咲きにけり」という句である。明治二十九年の作で、明治三十五年（1902）刊行の子規自選句集『瀨祭書屋俳句帖抄』に収められている。（高浜虚子選『子規句集』では、「松山十六日桜」と註記があり、「十六日桜」の右に「いざよいざくら」と読みがふってある²⁾。）明治二十九年二月、子規は病が重くなり、以後、臥床して過ごすことが増えた。その前年には従軍記者として旅順に赴き、帰途の船中で吐血、神戸の病院に入院後、松山に帰郷して数ヶ月療養していた。句集の明治二十九年の部には桜の句が五つ並べら

れている。車で一日上野の花見に行った折のものと思われる句が三つ、ついで「病中」と題して「寝て聞けば上野は花のさわぎ哉」の句、その次、最後が「松山十六日桜」の句である。

子規は松山中学校時代に作った文章に「桜亭仙人」「老桜漁夫」「香雲散人」と号したが、それは家の庭に桜の老樹があったからだとされている。それほど桜の花に思いがあったのなら、地元の名勝として知られる龍穩寺の冬の十六桜をも見に行っていただろう。当然、十六桜にまつわる伝承も知っていただろう。子規の句は実際は東京の家の病床にあって詠んだものである。故郷から十六桜の花の便りが届いたのだろうか。それとも、その花を見て感嘆した少年の日を思い出したのだろうか。いずれにせよ、病に倒れ、もう一度花がみられるだろうかと庭の桜の樹に祈った人の故事と、今、床に臥せている自分の姿とが、この句を詠んだ子規の脳裏で重なっていたと想像していいのではないか。伝承の奇跡など「うそだ」と形容せざるをえない子規の近代人の意識と、だが「うそのような」その桜が本当に咲いたのだ、という驚きと静かな喜び、そして祈りと憧憬に似た気持ちが読みとれる。

子規のこの句をハーンがどのようにして知るにいたったかは、わからない。ハーンは随筆の中でたびたび俳句を取り上げた。たとえば「蛙」(『異国風物と回顧』1898年)、「蟬」(『影』1900年)、「蜻蛉」(『日本雑録』1901年)、「蛭」(『骨董』1902年)などでは、日本人がどのような感性で蛙や蟬や蜻蛉や蛭などの生き物を捉えているかを考察しつつ、沢山の俳句作品を有名無名に関わらず紹介している。そうした句の収集と調査を手伝ったのは、教え子の大谷正信だったとされる。大谷は松江中学でもっともハーンに好かれた生徒の一人で、後に東京大学英文科でもハーンの教えを受けた。そしてハーンは大学時代の沢谷に学費を援助するかわりに日本研究の助手としてさまざまなテーマを与えて資料の調査にあたらせていたのである。この大谷が三高時代に高浜虚子や河東碧梧桐と同級で一緒に俳句を始めていた。

さらに大学時代には正岡子規とも親しくなり、やがて俳人として「子規門十哲」に数えられるほどになるのだから³⁾、ハーンに子規の句を教えたのは大谷だったと考えるのが自然かもしれない。

では、ハーンはなぜこの句を冒頭に掲げたのだろうか。しかも作者の名を伏せて。

ハーンが参照した原話を読むと、原話が伝える十六桜の由来そのものは、人間と桜の木の心が通じ合って花を咲かせた、という素朴な話である。「実に草木さへも心ありて其情に感ぜしならん」というように、花や樹にも心があり、花を見たいと願う人の気持ちに答える、そしてそれにまた人々が感動したということを示すエピソードである。

だが原話がさらに強調するのは、この十六桜がそれ以来毎年同じ冬の日には花を咲かせ、別名「節会桜」ともいってその時には花のもとに人々が相集い、その寒桜を愛でる、ということである。古くは舒明天皇が道後温泉行幸の折にこの桜を愛で、冷泉院為村卿が歌を詠み、そして以後も数多くの文人墨客が、この桜の木を訪ねてきては、冬に咲く花を愛でて、和歌を詠み、俳句をつくってきた、と『文藝倶楽部』の記事は記している。

舒明天皇というのは、飛鳥時代、七世紀の天皇である。つまり、ここでわかるのは、このような由来をもつ寒桜の木を、舒明天皇以来、古代から明治にいたるまで人々は尊いものと考えてきた、そして十六桜のもとで、いわば人間と自然の絆を再確認して、ことほぎ祭の祝祭の行事を行ってきたということである。

ハーンは、十六桜にまつわる、人間と桜の木の心の繋がりを表す伝説そのものにまず心ひかれたのだろうが、あるいは、それ以上に興を感じたのが、この素朴な伝説を宿した桜の花を愛で、歌を詠むことで祝い、ことほぐ、という感性が今にいたるまで生きていること、その伝統が保たれているということかもしれない。

正岡子規はハーンと同時代の人で、ハーンがこの「十六桜」を書いた、

その二年前に亡くなっている。子規の句をハーンに教えた大谷正信は、あるいは一緒に『文芸倶楽部』を読み、正岡子規以外にも、古くは、西行、一遍上人、それから松尾芭蕉、小林一茶なども、この十六桜の花を訪ねて、その時に感じた様々な思いを、それぞれが歌っていることを教えたかもしれない。

子規の十六桜の句と子規の文学をハーンがどのように理解したか、何ともいえない。だが、少なくともハーンが自分の作品の冒頭にわざわざその句を、しかも作者の名を伏せて掲げた理由のひとつは、古代以来多くの人が十六桜を歌いあげてきたという、連綿たる営みの最後、ハーンにとっては一番最近の位置にある作品だからなのではないかと思う。

ハーンは、この伝統の最後にあたる子規の句を冒頭に掲げ、それに続けて、今度は自分の「十六桜」という再話作品を置いたのである。冬の桜を歌い、ことほぐ、その言葉の系譜にみずからも連なろうとすることを、この「十六桜」という再話作品をもってハーンは示したともいえるのではないだろうか。

前にも論じたように、ハーンの「十六桜」とは、いわば悠久の時の流れを内包した樹木と向かい合い、その樹木の聖なる空間を、目に見える形で世にあきらかにした一人の人間の物語である。雪に閉ざされた、ほの暗い闇の中にそこだけ春の陽が射しているような冬の桜の神秘的な姿は、十九世紀後半の時代を生きたハーンが樹木の世界に投影した世紀末の幻想に彩られてもいる。

その上で、冒頭におかれた子規の句は、「十六桜」の再話作品としての文脈の広がりを知らしめ、ハーン作品と、ハーンが明治の日本に来て見出した世界とを結ぶ役割をはたしているのだといえるかと思う。このエピソードを通じて見えてくるのは、花や木、自然の万物に靈魂が宿り、その自然の中の魂に人々が歌いかけるような、人と自然がこまやかに心通いあう世界でもあり、さらに、そのようなものとしてハーンがみいだした日本

『聖なる樹々』補遺 「十六桜」と正岡子規の句

古来の自然観に価値を見出し、その伝統につらなろうとした、ハーンという西洋近代の人の感受性でもあるのだ。

再話文学の面白さは、古い物語が過去の記憶を包み込んだまま、時代の新たな衣をまとって蘇生することにあるかと思う。ラフカディオ・ハーンの再話作品では、日本の原話の世界を西洋の想像力が照らしだしているわけだが、こんなエピグラフひとつにも、ハーンの物語の奥深さが感じられるのでないだろうか。

[註]

平川祐弘訳「十六梅」小泉八雲著『怪談・奇談』所収、講談社学術文庫、1990年、100-101pp

- 1) 「聖なる樹々（上・下）—ラフカディオ・ハーン『青柳物語』と『十六桜』について」成城大学経済学部『経済研究』145・146号、1999年7月・10月
「From Folklore to Literature—Lafcadio Hearn and Japanese legends of tree spirits」成城大学経済学部『経済研究』150号、2000年10月
- 2) 高浜虚子選『子規句集』岩波文庫、1993年、198頁
- 3) 池橋達雄「大谷正信」平川祐弘編『小泉八雲事典』、恒文社、2000年、93頁